

蕪村の俳諧（二）

白井田，敏雄
岡山県立天城中学校

<https://doi.org/10.15017/10589>

出版情報：九大國文學. 3, pp.26-39, 1932-02-10. 九大國文學研究會
バージョン：
権利関係：

蕪村の俳諧 (二)

白 井 田 敏 雄

四

更に蕪村の連句に筆を進めて見なければならぬ。由來連句は、一句の持つ美を一表象として、一卷全體の美を統一實現する所に其の特異性を持つ。一個人の心を、一座全體の心の調和の中に融合する事であつた。句から句へ移りゆく何等かの變化が見られねばならないが、斯る變化の諸相は結局一卷の調和美を實現する爲のものであつた。こゝに實現された一卷の美は、やがて一發句の現す美にかへるべきであつた。發句に於て如上認められた蕪村の面目が、連句に於て全くその姿を消して了はぬ迄も、甚だ異なつた視點から眺められねばならないといふやうな事實は、果してあり得る事であらうか。

蕪村が芭蕉の風韻を慕うた事實に就ては既に述べたが、蕪村は連句附合の心を専ら芭蕉に學ぼうとした。「はいかいの繼句をまなはんには、まつ蕉翁の句を暗記し、付三句のはこひをかうかへしる」のが第一と考へた。「三四翁の句を唱へされは、口むはらを生ず」る思ひがした。就中蕪村の心を動かしたのは、かの蕉風の花實をそなへた猿蓑の風韻よ

りは、天和貞享の氣格であつた事は、あけがらすに序した凡菫の一文に於てもうかゞふ事が出来る。けれども、天和貞享の氣格は、形式の上には或は高華、或は雄麗、見るべきものを有してゐたが、その心に於ては、動もすれば前句の意味に即し易く、知的反省を思はせ、未だ蕉風の花實に遠いものであつた。天和貞享の附心は、その知的内省に俟つ所多き點に於て、先述せる蕪村風の半面に甚だ相似てゐる事が認められる。蕪村が貞享の蕉風に特に着目したのは、深く己が内抱せる氣格と相共鳴するものあるを認めたが故であつた。蕪村は發句に於て芭蕉に倣つて芭蕉に遠き一類の句を残したのであるが、連句に於ても亦未完成な蕉風を思はせる附心が目につくのである。従つて、完成された蕉風を味つた眼を以て之等に對する時は、何等の新味をも汲み難いのはやむを得ぬ所であらう。

然らば蕪村は終に蕉風の花實を窺ひ得なかつたかといふに、必ずしもさうではなかつたのである。蕉風附合の精神たる、にほひ、ひゞき、うつり、の附味に迫るものも決して尠くはなかつた。蕪村としては極めて初期の作品とされてゐるが、東風流に就て見るに、

ゆ ふ く れ な ゐ を し た む 雷 大 濟
魁 ん 恩 賞 う す き 老 の 身 を 蕪 村

の如き附合がある。天地を晦くして注ぐ大雨、はためきひらめく雷電は、單なる一の實景に過ぎないであらうけれども、風雅の心は之を單一なる状態に止めずして様々なる色とにほひの餘情を虚の世界に放散する筈である。此餘情が虚の世界に於て一の情調を生み、此情調を實の世界に迫る事によつて蕪村の附句は生れる。前句と附句とは、互に異なるも、而も情調の世界に於て相融合してゐる。斯る附合は、明に蕉風の眞髓を語るにほひ附の心でなければならな

い。而して又、前句の底に感ずる一種の逼迫した力は、直ちに付句の語勢の上に波打つてゐる事も見逃してはならぬ。こゝに蕉風のひびき附の心を汲み取る事は出来ないであらうか

錢 塔 の 二 文 落 又 五 文 落 大 濟

根 に う つ ほ 木 の 命 あり た け 燕 村

の如きが、また同じく東風流に見られる。固より安易に過ぐるの嫌は蔽ひ難いとしても、附句を生む心持に於て、蕉風の精神に通ふ所あるを認めざるを得ない。

の か れ 所 や 山 崎 の 町 多 少
返 し 遣 る 傘 に 狂 歌 書 付 て 燕 村

之は春慶引に見る所であるが、前句を宗鑑と見ても明に宗鑑を以てせず、何となく前句の心に融合せんとした所は、蕉風のおもかげ附の心でなくて何であらう。

矢 を 負 し 男 鹿 來 て 伏 す 霞 む 夜 に 樗 良
春 も 奥 あ る 月 の 山 寺 燕 村

一夜四唫に見ゆる此附合は、兩句夫々の美を實現し得てゐる事固よりだが、前句は附句を得て、附句は前句を俟つて愈々高めらるゝその情趣の美と純粹さ、蕉風のほひ付、うつり付の代表的なるものと云ひ得よう。

燕村が蕉風の附合を慕ひ、その筋骨をさぐり得た事に就ては、以上を以ても明に認め得るであらうが、今假に燕村が蕉風を凌ぐ附合を實現し得たとしても、それは只彼をして蕉風への忠實なる追隨者たらしむるに過ぎないであらう。

何故なら、右に述べたやうな心の附合即ち前句と附句とが、たゞ／＼隱微なる情調の世界に於て融合し、一卷全體の情調は結局一句の持つ心を象徴した渾融境であり、従つて又、移りゆく自然や、人生流轉の相の暗示であり、かの萬法一心に歸し、一心萬法に亘る絶對自由の心境は、芭蕉によつて既に其の完璧な姿が示されてゐるからである。そして又、蕪村が芭蕉を追慕し、且芭蕉の藝術を再現せんとすれば、此の境地に迄至らなければならぬ筈であつた。假令連句の附合に於て、多少にほひ、ひゞき、うつりの附味を探り得たとしても、それは所詮芭蕉の藝術の皮相なる摸倣に止まるであらう。風雅を尋ねてその片はしを心得たもの、かの支考の言葉に倣ふならば、言葉やさしくして心いつはりたる人と云はねばならない。だが併し、蕪村一家は、本質的に其の俳諧性を異にした作家であつた。蕪村は遠く芭蕉を憧憬したものゝ、眞實芭蕉の境地を體し得たと思ふ程自己省察に無智でもなかつたし、斯うした方面に喜びを見出す作家でもなかつたのである。斯くして自己の周圍に開けゆく自己の世界の意識に、矜りと喜びとを感じつゝ、獨自的な世界を開拓して行つた。こゝに二律背反的な、作家として深き苦惱を體驗した事であらうが、之等の事に關して、既に少しく觸れた筈であるから、こゝにその重複の煩を避ける。

蕪村に於ける磊落な風格に就ても既に述べて來たが、連句を通覽する時殊に著しく眼につくやうである。連句には固より缺くべからざる方式が顧みられねばならないが、蕪村の速句と方式とを照應する時、こゝに自ら蕪村の風貌のにじんでゐる事が見られる。「はいかいの去きらひのことは、諸書にあらはしてその法をむくべからず。しかれども俳諧は活物也、時に臨て其法を背くも又法とす。付ケに疎密あり、句に輕重あり、一卷の緩急句行の浮沈を相顧て、或おもてきらふものを七句に免じ、字去ものを五句に禁すること有。法は四時のことし、去嫌の扱ひは風雨寒暖のこ

とし。變化極りなし。」と斷じた蕪村は、連句の骨法を體してゐた。彼が法を破り、式に背くは、即ち格に入つて格を出でたるものとして自らを許してゐたと見なければならぬし、又しかあるべきが連句の理想でもあつた。けれども蕪村の連句に於ける態度には、自己の美意識に適從するに専らにして、自ら法を蹂躪したものゝ如くである。

冬 木 立 月 骨 髓 に 入 夜 か な 几 董
 此 句 老 杜 が 寒 き 腸 蕪 村

戀々として柳遠のく舟路かな 几 董
 離々として又蝶を待草 蕪 村

之等の脇に見ても、蕪村の積極的な心構へが遺憾なく露れてゐる。一體脇の生命とする所は、發句の餘情や景趣をして一段と精彩あらしむる所になければならない。發句への最も妙なる伴奏にある。此立場を越して發句に付き過ぎる事も、亦反對に付かずして自己の句境を樹てようとする事も等しく脇の本領を無視したものであつた。右の二例の、前者は脇に人名を見せた點に於ても大きな破格が見られるが、句そのものが發句の批評を下した形で、明に立場を飛躍したものゝ好例であり、後者は何れかと云へば、自己の句境に即し過ぎた嫌が著しい。蓋し兩發句の持つ美に共鳴した蕪村の口を衝いて出た脇であつて、彼として斯く付ける他に言葉はなかつたであらう。缺點と同時に蕪村の面目を見る恰適の句たるを失はない。脇に於て既に斯の如く、況んや他の煩雜な式目は到底彼を左右し得るものではなかつた。彼はまた、「發句とひら句とのわいためをこゝろ得ること、第一の修行なりゆるかせにおもひとるへからす。」

と説きはしたが、蕪村の平句を通じて、餘りに發句的な味ひに満ちてゐるものが多い。

あらし吹草の中よりけふの月 樽良
露ふり水烟山遠く跡細し 蕪村

の如き傍若無人的な形式をすらとる事を躊躇しなかつた。

癡落て罪も報ひも後の世も 蕪村

忘れ時くおとつるゝ友 同

の如き謡曲の文言を思ひ浮ぶまゝに當座の知的興味に委せたやうな附合や、

後れても盛りはもれぬ瓶の花 几董

柳の窓に三四坊あり 蕪村

などと當座の洒落に自在の才氣を閃かせたに過ぎぬものも少くはなかつた。時に輕やかな附合も試みて、情調の一轉を企てる事は蕪風に於ても屢々見られた所であるが、其の心の深さと純粹さとに於ては、知的興味に傾き過ぎて却て一卷の韻致を殺ぐの恨があつた。斯うした傾向は時には、

撫られた損たゝかれてしる 稻太

餅好の大名通る花の山 蕪村

の如き、理知的な遊戯、駄洒落に墮する事も珍しくはなかつた。

斯うした附合は、固より蕪村としても大きな缺點には相違なかつたけれど、また蕪村風の特異性を見るべき目標で

なければならぬ。先に述べた蕉風のほひ、ひゞきの域を凌ぐ一類のものと相俟つて、正に蕪村風の兩極端とも目すべきものであらう。が併し蕪村の獨自性は自ら別に在つた。

蕪村風を以て許すべき附合の半面は、先に發句の場合に述べた如き、知的内省的なところに見出される。即ち前句と附句とが、先述したやうなほひ、ひゞきによるのではなく、何等かの知的な洗練さと技巧とに勝つてゐるものである。

白うたも關の東は聲高に 吞獅
杉苗匂ふ曉の雨 蕪村

(太祇追悼吟)

に於ては、佶居粗朴に對して柔和清新の景致を以てした配合美が見られるであらう。

しかももとの草履にはあらず藁草履 春來
をぼつかなくも慈悲心と啼 蕪村
猿丸の顔をかば茶に彩色て 大濟

(東風流)

燈盞を鐘鳴方へかたふけて 几董
此夜樂天江州の司馬 蕪村

(明鳥)

畫の狐の貧しくも鳴
几董
中わるき軒を竝べし八庄司
燕村

(几董日記)

手こねの香爐打守りつゝ
嵐山
かくて世に四位と成べき身なりしを
燕村

(一夜四陰)

聲だみて物うち語る雨の日に
月溪
くきやうの葛かつみ葺てよ
燕村

(六吟歌仙)

夢にあひたる人のつれなき
月居
二千里の外とは見へし花に月
燕村

(几董初懷紙)

等の如く、或は古曲の文言を踏へて而もそこに前句との美的關係をしのばせ、或は故事に依つて而も前句の景趣を生かさうとする所に、知的にして而も特異な美を前句との間に實現し得たものが極めて多い。而して又、

抱子より負ふ子の拜む三日の月
必化
質屋も見ゆる里の露霜
燕村

(春慶引)

に至つては、右の傾向が一段と冴えて、蕪村の本領に迫つてゐる事を思はせる。固より、貧乏人の子實から生活の不
如意へ、而して質屋通ひへ、と云ふやうな知的な推移も穿鑿されなくはないが、之等を超越したユニークな景趣の對
立に迄到つてゐる。

舞 扇 泪 見 せ し と か さ す ら ん 大 魯

波 そ ゝ ろ な る 由 井 の 濱 風 蕪 村

に到つては、おもかげ付、うつり付をこめて、蕪風のにほひ付の附心に近からう。

蕪村風を語る他の一半は、やはり發句に於ける如く、鮮明な知覺の世界の展開である。前句の氣色を生かす爲の最
も相應しい氣色を以て付けるに在つた。前句の印象に配するにふさはしい印象を以てする斯の附合こそは、蕪村風に
あつて最も精彩を放つものでなければならぬ。

一 艘 つ な き 捨 し 裏 門 武 然

片 脚 で 寝 か ゝ る 鶴 に 山 お ろ し 蕪 村

(春慶引)

曙 の 川 浪 白 く 水 増 し て 几 董

藤 の 若 葉 の 空 に 雨 降 る 蕪 村

(几董日記)

などはその代表的なものであらう。

梳れて落る髪をかこちて
匂ひ來る柑子の花の覺束な
燕村

(夏衣)

ねもころに朝よさ撫し牛の艶
葉にちり水にうかぶ紫陽光
燕村

(几董自筆日記)

二聲 三こへ蛙鳴く晝
行春や御經書寫の墨へりて
燕村

(夏衣)

などに於ては、單に美しい景致の對立に止まらず、知覺的な氣色を機縁として、深く情調の世界にまで脈うつものがある。此點、蕉風の附心を思はせるものがあるが、而も尙鮮明な知覺、の一點に於て、蕉風に見出し難き特質を秘めてゐる。

尾花 かもとの石に火を打
山賊の月夜に塚をあはくらん
燕村

(一夜四驗)

老たる人の松明ともし行
几董

燕村の俳諧

三五

淀鳥羽に牛の病のはやりつゝ 燕 村

(一夜四唸)

砦 　　< 　　に 　　矢 　　叫 　　の 　　聲 　　道 　　立

風 の 　　あ り 　　< 　　雨 を 　　誘 ふ ら ん 　　燕 　　村

(几董自筆日記)

別 　　し の 　　ひ す 　　君 か 　　手 を 　　ひ く 　　二 　　柳

流 　　矢 の 　　そ な た の 　　空 を 　　恨 ら ん 　　燕 　　村

(几董自筆日記)

等は聯想の自在さを思はせ、亦蕪村風の一斑を窺はしむるものであるが、其の艶冶の致、跌宕の趣は、かの芭蕉が貞享の氣格に通ふものとも云へるであらう。

蕪村の發句に見られた本色は、連句に於ても遺憾なく現はれてゐる事は、以上を以てして明かである。敢て蕉翁の語風に倣はず、自己の俳諧性の適するまゝに磊落自由の俳諧を試みて、そこに独自の附合を實現する事が出來た。或は鮮明な印象の展開に、美しい氣分の融合に、艶冶跌宕な想像の世界の現出に、そして又、古曲的な美を混へ、修辭的巧妙に俟つて、蕪村風附合の特色はまがふべくもなく染出されてゐる。そこには蕉風の附合を模倣した理由を以て其價値の幾分が減殺さるべきものありとしても、而もなほ如何ともし難い蕪村の世界が残された筈である。それは即ち、前句との間に認められる美への把握に、知覺的と知的内省的と、此二つのカテゴリーを以て蔽はれる二傾向であ

つた。こゝに於て、知覺的な、知的な過程によつて把握された美は、情的のそれに比して價値の低いものである、といふやうな見解は、さして問題ではない筈である。たゞ蕪村に依つて實現された独自の連句を諦觀すれば足ると思ふ。

五

凡そ、何等かの短所を内包しない長所はないであらう。蕪村風の連句に長所を求めるなら、如上の特異性を外にしては求め難い。が併し、蕪村風連句の非難さるべき點がありとせば、同じく此の點に存するは争ひ難き事實である。鮮明な知覺の展開は、それ自らの美の鋭さと魅力とを齎すとしても、動もすれば平面的な單調さに流れ易い。知的に洗練された美の推移にも、亦夫々の餘裕と靜けさを持つてはゐるが、動もすれば皮相に走り、理知の遊戲に終り易い。一方に於て、連句それ自身に缺くべからざるものは、統一ある變化の美であつた。固より、俳諧は活物、時に臨んでその法に背くも亦法ではあらう。附合の疎密、句の輕重、さては一卷の緩急浮沈を説いた蕪村は、連句の骨法を體してゐたし、又之を實現する事も出來た。けれども、以上のやうな缺點を伴ひ易い特質を以てして、尙且、一卷三十六句乃至は千句に亘る變化と統一の自在を得ようとする事は、殆んど至難な望みと云はなければならぬ。蕪村風の連句に情調の深さと力強き、又その變化統一の美に缺くる所のあつたのは、また蔽ひ難き事實である。かの蕪村風の俳諧に於て、蕪村風の特質に並ぶものなきは言ふを待たないが、同時に、蕪村風に缺けてゐた情調の深さと力強さ、而してその變化と統一といふ點に於て、殆んど完成されたものを有してゐた。こゝに少しく、蕪村風と對立的な芭蕉風連句の長所に就て述べるなれば、芭蕉の魂は、葉末に結ぶ一滴の露の魂であつた。然るが故に、天地に遍滿する宇

宙の魂であつた。芭蕉の一心が蓬々として萬法に流れ入る所には、空しいけれども大きな愛が脈うつてゐた。芭蕉の俳諧は斯うした愛の實現であつた。一發句にも一卷の連句にも斯うした愛を示現する所に理想がかけられてゐた。此事は、十七音句の情調の中に於てよりも、一句の情調が更に他の情調を生み、互に流入融合しゆく連句形式に於ての方が、少くとも自然であり、又より理想に接近し易かつた筈である。假に、比喻を以て説くならば、一句の情調は恰も空間を流るゝ一筋の旋律である。此旋律は他の一筋の旋律と和する事により、一段の音律美を發揮する。が、更に他の多くの旋律を迎へる事によつて愈々その諧和の美を深め高め得る筈である。連句の美は、即ち多様な旋律を統一した大なる諧和の美でなければならない。而して此諧和の底を流るゝものは、一發句の持つ細い一筋の旋律であつた。芭蕉俳諧に於て見らるべき發句より連句への必然性はこゝに在る。芭蕉連句に於て、情調の深さと力強さ、又その變化統一に完璧な相が感ぜられるのは、右の意味に於て、芭蕉の俳諧性がそれ自身に最も恰適なる表現形式を採つた所から考へらるゝ必然的な結果であると云へやう。蕪村の到り得た世界は、斯る動的な音律的世界ではなく、寧ろ靜的な繪畫的世界であつた。一つの表象も、芭蕉俳諧にあつては、細い旋律を傳へん爲の機縁に過ぎず、蕪村俳諧にあつては、表象それ自身の個性の文學的描出にあつた。前者は表象に即せず、後者は之に即するの他はなかつた。従つて表現形式の上に見らるゝ技巧は、芭蕉にあつては、己が心の旋律のよりよき象徴の爲であり、蕪村にあつては、表象に見出さるゝ個性美のよりよき表現の爲であつた。蕪村は斯る美の表現にあつて、知覺的機能要求と知的機能要求との二方面に訴へた。こゝに表された夫々の美は、表象に即するといふ點に於て、芭蕉俳諧と明に相反してゐる。一句が他句と共に奏づる諧和の美はなく、寧ろ一句は一句の美に自足してゐた、連句への必然性を缺いてゐた。蕪村

風連句に、深奥なるもの、力強きものを求め難きは亦當然の歸趨といふべきであらう。だが併し、斯るが故にこそ、燕村独自の俳諧性に光あらしむる所以となつてゐる事は、繰返し繰説する迄もない。

燕村俳諧の精彩は斯くて、連句に於てよりは寧ろ發句に於て、より鮮かに認められる。そこには芭蕉によつて未だ開拓されなかつた美的把握の方法が盡され、美の種々相が捉へられ、表現上の技巧が遺憾なく示されてゐた。假令、自然への省察に於て芭蕉の深さはなく、人生的認識に深さや複雑さを思はせる底のものもはなかつたとしても、たゞ美しかつた。平面的に鑑賞者の知覺を奪ひ、魅惑するに十分であつた。非現實的に知的内省によつて餘裕ある美の世界に誘ひ、鑑賞者を喜ばせるに十分であつた。燕村俳諧の理想も亦こゝに在つた。

燕村は深く芭蕉を追慕し、蕉風の昔に還さん事を希つた。併し乍ら、燕村に依つて解釋された蕉風俳諧の本質は、稍獨斷に走つた嫌あるべく、一面的に失した非難は蔽ふべくもない。芭蕉が孤獨の生涯を旅に過した悠々自適の生活には、燕村によつて認められなかつた或ものがあつた。燕村の離脱せんとした一面と、燕村の憧憬れてやまなかつた一面と、その何れをも止揚したアプリアオりの世界であつた。にも拘らず、燕村の上に投ぜられた芭蕉の影は、固より多くの疑問と共にではあつたとしても、人寰を脱した貴く美しいものに思はれた。燕村はこれに指導され、誘惑され乍ら俳諧の道を歩み続ける中に、芭蕉とは違つた独自の世界に出てしまつた。こゝにして芭蕉に遠き淋しさを嘆くよりは、己が前に拓かれた新しい世界を深めて行かうとの自信が燕村の中に燃え初めてゐた。芭蕉俳諧の憧憬者としての俳人燕村は、終に芭蕉へのディレッタントとして終つたであらう。けれども、燕村に依つて實現せられた作品は、芭蕉俳諧以後、俳諧展開の相を最も力強く代表してゐる點に於て、芭蕉とは別の世界に於て永くその精彩を放つべき大いなる作家でなければならぬ。(了)